

平成 26 年度東北・北海道内水面試験研究連絡協議会について

中島美由紀

本会議は、初夏の晴天の下、平成 26 年 6 月 26 日に札幌市の「かでの 2・7」会議室にて開催されました。この会議は、全国水産試験場長会の傘下の内水面水産試験場長会の地区会議に相当します。年に 1 回、東北 6 県と北海道が持ち回りで開催しており、会場が担当するのは平成 19 年以来の 7 年ぶりでした。今回は、独立行政法人水産総合研究センター増養殖研究所の鈴木内水面研究部長と東北 6 県の試験研究機関の場長・所長はじめ研究職員の計 11 名の方々に、会場から永田場長、小林副場長、小林さけます資源部長、鈴木内水面資源部長と他 12 名が加わり、総勢 27 名が参集しました。

当日は午前 9 時 30 分から永田場長の挨拶で始まり、小林副場長の司会により進行し、午前中は研究の事例発表、午後には場所長分科会と専門分科会に分かれて、最後に両分科会の報告で午後 5 時に締めくくられました。1 日のみの開催でしたが、活発な議論と有意義な情報交換がなされました。



写真 1 永田場長の開催挨拶
(撮影 新井主査)

では、本会議の内容をご紹介します。午前の研究事例では、主にサクラマス、アユ、シジミ、魚道、放射能を扱う以下の 9 題を各道県の担当者が発表し、熱心な質疑が繰り返されました。

- (1) シジミの水質改善効果と中間育成への取組みについて (青森県)
- (2) 生態系ネットワーク再構築を目的とした簡易魚道の開発 (秋田県)
- (3) アユ種苗生産の効率化への取組 (青森県)

- (4) サクラマスの増殖に関する研究について (岩手県)
- (5) 広瀬川における遡上量の推移と設置した魚道の効果 (宮城県)
- (6) 福島県の湖沼に生息する魚類の放射能調査 (福島県)
- (7) 最上川におけるアユ産卵期の禁漁と流下仔魚数の推移について (山形県)
- (8) サクラマスに関する魚道効果調査 (北海道)
- (9) 北海道のアユ研究の現状と今後の取り組み (北海道)

午後の場所長分科会では、全国内水面場長会議に向けての要望となる地域の懸案事項等を検討し、また、全国湖沼河川養殖研究会と養鱒技術協議会の加盟県は全国大会の開催要項等について報告が行われました。一方の専門分科会では、各道県が提出した以下の 13 の協議事項(括弧内は提案道県)と、各機関の平成 25 年度事業結果と平成 26 年度事業計画の概要、及び、平成 25 年度魚病発生件数並びにその概要や特徴に関してそれぞれ情報交換がなされました。

- (1) サクラマス稚魚(早期放流群、体長 5cm)用小型外部標識について (青森県)
- (2) サケマスふ化場における飼育用水の確保について (青森県)
- (3) アユ種苗生産における親魚系統について (岩手県)
- (4) 民間養魚場に対する施設整備等への支援について (宮城県)
- (5) 三倍体魚等の利用状況について (宮城県)
- (6) 冷水性魚類の発眼卵埋設放流について (秋田県)
- (7) 発眼卵および種苗の生産・販売の状況について (秋田県)
- (8) 今期のアユの遡上状況について (秋田県)
- (9) 水産用医薬品等の使用について (秋田県)
- (10) 放流種苗の由来について (秋田県)
- (11) アユ飼育用水に含まれる亜鉛の毒性について (山形県)
- (12) 河川における濁りの発生とその長期化による水産生物への影響について (山形県)
- (13) 汽水域漁場での漁獲物の異臭(カビ臭)の発生状況について (北海道)



写真2 午後の会議風景
(撮影 新井主査)

参加された皆さんは、それぞれ初めてお会いした方だったり、なつかしい面々だったり、いろいろだったようです。勤務地は異なるものの、担当する魚種や業務の状況が同じで共通の課題が多いため、話題に事欠くことなく、この会議の終了後の有志で集った情報交換会も盛況で時間が足りないほどでした。

最後には、次年度の開催地である山形県内水面水産試験場の鈴木場長から、「さくらんぼの季節にお待ちしております。」とのお言葉をいただき、各々方の活躍と健康を祈念してお開きとなりました。

(内水面資源部 なかじま みゆき)